

2022年10月4日(火) 快晴

日光街道つまみ歩き (その1)

日本橋ー北千住

本年6月初めに日本橋から京都三条大橋迄の旧東海道を約1年半かけて夫婦で踏破し、暫くその余韻に浸っていた。この間友人達から次はどこを目指すのかとの質問を頻繁に受け、この道の先達吉田清直さんに相談したところ、日光街道が良いのではないかとアドバイスを受けた。我々もその気になって参考書を購入などしていたが、7月の末から幸子が腰を痛め、短期間であったがほとんど歩行艱難になり、その後のCT検査でその原因が背骨にあることも判明し、ブラ歩きを暫時中止していた。偶々本日は晴天の予報で、幸子の体調もある程度戻ったので、決して無理をせず行けると言うことで昨晚決断し、本日決行した次第である。具体的には日光街道の第1歩として日本橋から北千住までを6時間半ほどかけて歩いた。スマホのヘルスケア情報ではdoor to door約12km、歩数23500となっている。途中昼食やカフェにも立ち寄ったのでそうした時間を除外すると時速2.5km程度と旧東海道ブラ歩きに比べるとかなりペースを落としている。幸子の腰の状態を勘案するとこれで良かったと思っている。

自宅で朝食をゆっくり食べて横須賀線で日本橋まで行き、通りがかりの女性に写真を撮って貰って10時半歩行スタート。今日の目標は千住の回向院である。ここは江戸時代の刑場跡であるが、杉田玄白らがここでの腑分けとオランダの医学書を比較しその正確さに驚愕して解体新書の翻訳に取り組んだという日本医学界の聖地である。ここは是非見たかった。

快晴だが流石10月、さっぱりしていて気持ちが良い。歩行開始から15分弱で薬種問屋の集積地であった日本橋本町を通るが、ここには現在も武田薬品工業の本社があった。この先も浅草までは色々な専門業種(例えば繊維、人形など)の固まった一角があり、中には一見の客には商品を販売せずと掲示した店もあり、歩いていて趣がある。また町名も大伝馬町、馬喰町、浅草橋など、橋の名前も両国橋、厩橋、言問橋などで江戸情緒を満喫した気分で歩みを進めた。反面今日は幸子のため試運転の趣旨もあるので、沿道に見るべき場所はいくつもあったが、極力それらには立ち寄らず距離を稼ぐこととした。

そうこうしているうちに「駒形どぜう」を通り過ぎ、丁度正午に浅草の雷門の前についた。驚いたことに、多数の人力車が道行く人々に声をかけている。その数凡そ50くらいはあったと思う。今日は客が乗っている人力車は1台しか見なかったが、これでinboundの外国人が増えると彼らの商売も繁盛するだろう。雷門のすぐ並びには有名な「神谷バー」がある。ここは神谷傳兵衛が明治13年(1880年)に日本で最初に開業したバーで、戦前からデンキ

ブランでその名を全国に知られている。蜂ブドー酒として親しまれていたブドー酒も神谷酒造の製品である。実は前社長の故神谷信彌君は筆者の学生時代からの友人で、我々は今回ここでのランチを楽しみにしていたが、なんと毎週火曜日は定休日とのことで(写真1) 目論見が外れて甚だ残念な次第であった。そこですぐ近くの蕎麦屋に行ったがここも休み、浅草の仲見世界隈は結構人混みが激しかったので歩いていけば飲食店があるだろうとの見通しの下に歩き出したが、街道には全く気の利いた店がない。ふと見ると左に綺麗な公衆トイレがあり、そこから斜め左に感じの良い小道が続いている。ここは所謂山谷地区のようだが、今は跡形もない。だんだんお腹がすき、また少し歩き疲れたところに偶々カフェがあったので午後1時にここに入ってそれぞれがコーヒーと焼き菓子二つで何とか空腹をしのいだ。結果としては味も雰囲気も良い店で、ここで50分ほど英気を養ってまた街道歩きに戻る。歩いているうちに台東区から荒川区に入る。

2時少し前に南千住の駅近くで小塚原刑場跡と首切り地蔵に差し掛かる。ここは江戸時代に刑死者などを対象に刀の試し切りや腑分けなどが行われたとの解説の文章がある。死者を相手の試し切りとは恐れ入った。物騒なところだ。そのすぐ近くで常磐線のガードを潜ったところがお目当ての回向院である。ここには安政の大獄で処刑された吉田松陰(写真2)や橋本左内の墓がある。弟子の活躍を見るまでもなくこうした人たちを明治維新の世界で自由に泳がせたら随分日本も変わっていただろうと思うと、理由はあるにしても井伊直弼は非道いことをしたものと思わざるをえない。それと並んで回向院は、ここでの腑分けの見学を通してオランダ語のターヘル・アナトミアの解剖図の正確なことに驚愕した前野良沢や杉田玄白をして、苦心惨憺の末に解体新書として翻訳を完成させた、日本医学界の聖地の一つである(写真3)。このことは小学生か中学生の頃の国語の教科書に載っていたので良く覚えている。

ここで打ち切りにしても良かったが、もう少しで千住大橋で、幸子ももう少し歩けるというので、もう少しだけ頑張ることとした。千住大橋はなんと言っても芭蕉の「奥の細道」の旅の出発地として有名である。ここには荒川区による親切な解説があるが、それによると、芭蕉は深川から船でこの場所に着き、ここから「前途三千里(の旅)のおもひ胸にふさがりて、幻のちまたに離別の泪をそそく」として

行く春や鳥啼き魚の目は泪

と詠んだという(写真4)。実は日本橋から宇都宮までは日光街道と奥州街道は同じ道とのことで、従って我々は日光街道を歩くことで奥州街道も歩いていることになっているわけである。我々は奥の細道というと専ら芭蕉の東北旅行記と思いがちで、また、これは誤りではないが、同じ場所にある「おくのほそ道行程図」(写真5)の通り、芭蕉は千住を出発して奥州を回った後日本海を西下し、大垣まで行っている。これを徒歩で行くのであるから正

に前途三千里の気分だったろうと思われる。

ここで目的は達したが、帰宅するためには電車の駅まで歩かねばならない。そこでもうひと頑張りというわけで北千住駅を目指して日光街道を歩き続けた。この辺りの日光街道は国道からそれて正に旧道のままで、甚だ趣がある。途中で芭蕉の句碑や立像があり、街道に面する家は江戸時代の屋号を掲げている。また、森鷗外が医者である父の下で一時同居していた旧宅の碑（千住の鷗外碑）もあり歩いていて楽しい。このすぐ近くにおいしそうな珈琲屋さんがあったのでそこでまた一休みをし、すぐ側のお茶屋さんで急須を購入したところここでも緑茶を供され、いい気分になって4時10分の北千住発品川行き常磐線直通列車に乗って1時間ほどで帰宅した。

矢張り旧街道歩きは楽しいというのが家内と二人の共通した感想であった。とはいえ吉田さんの話では宇都宮まではあまり見るべき場所も多くはないとのことなので、次回は場合によっては紅葉のうちに電車で日光金谷ホテルに直行と言うことも視野に入れて考えてみることにした。

実は本日10月4日は我々の54回目の結婚記念日である。1年前の結婚記念日には甘酒茶屋から箱根を越えて芦ノ湖に到着した日であることを思いだした。今年は銀座の交詢社で松茸を中心とした10月の特別料理があるというので記念に家内と二人で食べに行こうと思っていたが、帰路の電車に乗ってどっと疲れが出たので、残念ながらこれは中止とし、もし翌日体力があれば銀座まで食事に行こうかということになっている。完



写真1 神谷バー（定休日）



写真2 吉田松陰の墓



写真3 回向院の解体新書の碑



写真4 千住大橋：奥の細道旅立ちの地



写真5 奥の細道行程図